

資料閲覧室^[12]が所蔵する文献を中心に、中国国内外で刊行された敦煌・吐魯番に関する文献が検索できる。

具体的な検索方法については、国家図書館内の全体検索の際に、敦煌吐魯番文データベースを指定して検索することになる。

●『俄藏敦煌文献』収載文献 Database

<http://h0402.human.niigata-u.ac.jp/~dunhuang/doc/russiatop.htm>

『俄藏敦煌文献』収載文献 Database は、新潟大学敦煌研討班のプロジェクトの1つで、関尾史郎、玄幸子両氏によって作成された、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サクトペテルブルク支部が所蔵する敦煌文献に関するデータベースである。画像を閲覧することはできないが、各資料1点1点に付けられた番号、書籍の収録ページ数等が検索できる。



図4 中国国家図書館：敦煌吐魯番文

□ 終わりに

全体的に、文献や画像の電子化については、一段落したように見える。特に、画像については、それを所蔵する国立の博物館・美術館が独立行政法人への移行に伴って、自己の存在意義を示すために広報活動の一環として所蔵品の電子化、公開を積極的に行ったため、急速に整備された。

今後は、それらを活用した研究が行われると共に、国際敦煌項目のように、共同で研究を行うことが主流になると思われる。

注

[1] SAT : <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~sat/>

- [2] INBUDS : <http://www.inbuds.net/>
- [3] e 国宝 : <http://www.emuseum.jp/>
- [4] 文化遺産オンライン : <http://bunka.nii.ac.jp/>
- [5] 東京国立博物館情報アーカイブ (仮称) > 公開研究会「博物館情報学の構築」
<http://webarchives.tnm.jp/archives/>
- [6] 国立情報学研究所 : <http://www.nii.ac.jp/>
- [7] デジタル・シルクロード・プロジェクト : <http://dsr.nii.ac.jp/>
- [8] 東洋文庫 : <http://www.toyo-bunko.or.jp/>
- [9] デジタル・シルクロード用語集 : <http://dsr.nii.ac.jp/term/>
- [10] Google Earth : <http://earth.google.com/>
- [11] 写真でつなぐシルクロード : <http://dsr.nii.ac.jp/photograph/>
- [12] 前述の国際敦煌項目の中国担当部署でもある。
<http://idp.nlc.gov.cn/>

Wikipedia とは何か

藤原 敦

□ はじめに

本稿では、今話題のオンライン百科事典 Wikipedia (ウィキペディア)^[1]の概要を紹介すると共に^[2]、その課題と将来について考察を行う。

□ Wikipedia とは

Wikipedia とは、Wiki クローン^[3]の1つである MediaWiki^[4]を使用して共同で百科事典を作成するプロジェクトであり、アメリカの非営利団体、Wikimedia 財団^[5]によって提供されている^[6]。2006

年8月現在、200以上の言語で作成され、合わせて467万もの項目が作成されている。

このWikipediaは、2001年1月にNupedia^[7]の編集担当であったLawrence M. Sangerと、現Wikimedia財団理事長のJimmy D. Walesによって英語版がまず創設された。

次いで、同年5月に日本語版、フランス語版、ドイツ語版など13の言語版が創設された。中国語版の創設は2002年10月である。

□ 利用方法について

Wikipediaを閲覧する場合、特に閲覧料金等は発生しない。また、その内容についても、一部を除き、コピーレフト^[8]を採用しているため、改変、転載等が可能である。但し、その場合には、後述するGFDLなど、各項目^[9]・画像・音声ファイルごとに設定されているライセンスに従わなければならない。

■ 閲覧に際して

閲覧の際、各項目内のブラウザの初期の設定では青リンクとなっている単語(項目名)をクリックすると、同一言語版Wikipediaの内部の当該項目が表示される。水色リンクをクリックすると、他言語版または百科事典以外のプロジェクト、或いはWikipedia外のサイトが表示される。

また、項目下部のカテゴリ欄に表示される各カテゴリをクリックすると、同一ジャンルに属する項目一覧

が表示されるほか、当該項目について他言語版にも同じ概念を解説する項目がある場合には、項目左下に他言語版へのリンクが表示される。

各言語版の内容については、英語版はNupediaの執筆者が移入したこともあり、主に自然科学分野が充実している。日本語版は、専門家の参加数が少ないこともあり、メインカルチャーよりもサブカルチャーの項目数が多い^[10]。

□ 項目を編集するには

以下、特に断りがない限り、日本語版をモデルとして解説する。

さて、Wikipediaは誰もが編集できる百科事典であるが、具体的にWikipediaの各項目を編集するには、各項目の上部^[11]にある「編集」タブをクリックする。すると、編集画面が表示されるので、適宜マークアップ言語を使用して、編集を行う。

この際、一般の項目で試しに編集を行い、その結果を保存してしまうと、結果の内容によっては悪戯と勘違いされる恐れがあるため、試しに編集を行う際には、「プレビュー機能」を使用して保存せずに編集結果を表示させるか、練習用ページである「Wikipedia:サンドボックス」にて編集を行う。

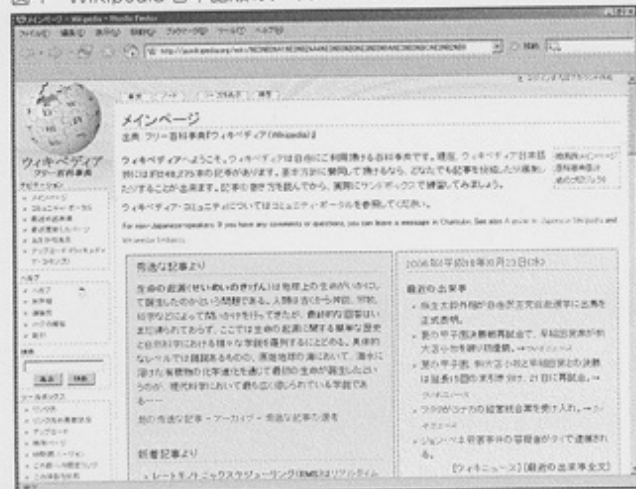
また、新たに項目を作成する場合には、既存の項目内の赤リンクとなっている項目名をクリックするか、ない場合には「プレビュー機能」を使用して赤リンク項目を作成する。

そのようにして編集作業を行い、保存すると、編集内容が直ちに項目に反映されると共に、当該項目の履歴ページ^[12]に、自身の使用するIPアドレスが編集時間と共に記録される。なお、Wikipediaでは同一IPアドレスを使用する不特定多数の利用者と当該項目の編集者とを区別するために、アカウントの作成(無料)が推奨されている。アカウント作成者(ユーザ)には、自分専用の作業スペースが与えられる、任意の項目の更新状況をまとめて閲覧することができる等のメリットがある。

□ GFDLについて

さて、WikipediaではWikiクローンを使用

図1 Wikipedia日本語版のメインページ



することにより、他者の文章を容易に改変することを、技術面で可能とした。

しかし、通常、他者の文章を改変するには、当該文章の著作権者の同意を得る必要があり、その権利処理には多大な時間と費用がかかる。

そこで、Wikipedia ではこれらのコストを短時間で適切に処理するために、GFDL^[13]を採用した。

GFDL とは、GNU Free Documentation License の略称で、フリーソフトウェア財団^[14]が提唱するライセンス形式の1つ^[15]で、コピーレフトに基づき、当該著作物の著作権者の創造行為を尊重しつつ、適正な利用を広範囲に普及させることを目的とし、そのために、一定の条件^[16]の下に、他者による適正な改変や転載を認めるというものである。

Wikipedia では、このライセンスを採用することにより、他者の文章を改変することを法的に可能とし、ユーザに対し、自らの著作物を GFDL でリリースすることに、編集時に同意を求め、ユーザが編集内容の保存ボタンをクリックすることで、同意したとしている。各項目の履歴ページに個々のユーザの編集内容が日時と共に全て記録されているのは、この GFDL が求める条件に従っているからである。その他にも他言語版からの翻訳、肥大化した項目の分割、項目の改名などの編集行為には、GFDL の求める条件に従った手順通りに編集することが特に求められている。

□ 編集・運営方針の策定

さて、そのようなして不特定多数のユーザが参加し、多数の項目が作成されるようになると、項目の編集内容を巡ってユーザ同士が対立^[17]、或いは百科事典の項目としてそぐわない内容が投稿されるなどの事態が発生した。

そこで、ユーザ間で協議が行われ、Wikipedia 全体の運営方針、編集、或いは他者との関わりの際の方針、及びガイドライン^[18]が策定された。中でも、特に重要な方針は^[19]、「Wikipedia: ウィキペディアは何でないか」と「Wikipedia: 検証可能性」、「Wikipedia: 独自の調査」、「Wikipedia: 中立的な視点」である。

「Wikipedia: ウィキペディアは何でないか」

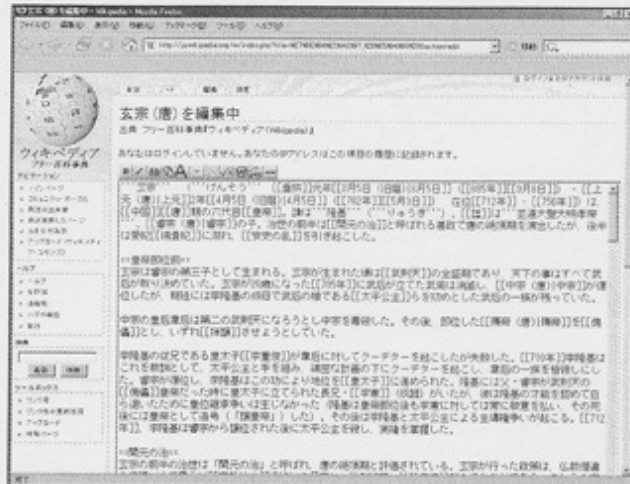


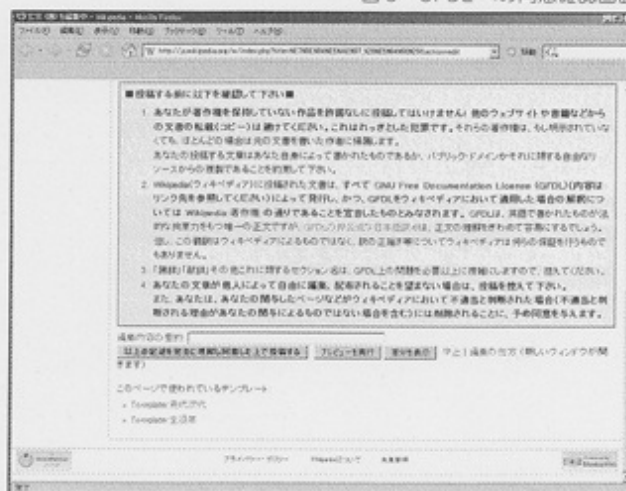
図2 項目の編集画面

では、Wikipedia をオンライン百科事典として定義し、それ以外の何かであることを否定し、「Wikipedia: 検証可能性」と「Wikipedia: 独自の調査」では、Wikipedia に執筆する内容は、必ず査読を経た文章を参照として執筆し、執筆者が独自に研究した内容を投稿してはならないと規定し、「Wikipedia: 中立的な視点」では、執筆する際には特定の観点からの解説のみを記載することなく、様々な観点からの解説を記載することを求めている。

Wikipedia では、これらユーザ自身で策定した方針・ガイドラインに従って活動することが求められる。

しかし、中にはこれらの方針を守らず、不適切な行動を執り続けるユーザや、ユーザ間で合意が成されず、

図3 GFDL への同意確認画面



1つの項目をお互いに自身に都合の良いように編集を繰り返す、「編集合戦」が発生することがある。

そうした利用者の閲覧に支障を来す状態を改善させるため、同じくユーザ間の協議によって策定された「Wikipedia: 追放の方針」や「Wikipedia: 保護の方針」、「Wikipedia: 削除の方針」等の方針に基づいて、対象となるユーザ、項目それぞれ1件ごとにユーザ間でその扱いを審議し、その決定に従って、特定ユーザの編集制限や、特定項目の編集制限、特定項目の削除などの具体的な処理が、ユーザ間の選挙によって信任された管理者と呼称される当該処理に必要な一部の機能をコミュニティより信託されているユーザによって行われる。

□ 課題と将来について

Wikipediaはその創設から現在に至るまで活動を続け、特にここ1、2年はGoogleなどの検索結果の上位に表示されるようになったことから閲覧者、ユーザが急速的に増加し、Alexa^[20]の調査では、2006年8月現在、Wikipediaは世界の全サイト中、17位のアクセス数を記録している^[21]。

閲覧者、ユーザが増加することは喜ばしいことではあるが、それに応じて、以前では大問題とはなからなかった問題が次々と起きている。

まずは、運営資金の問題である。

Wikimedia財団は非営利団体であり、その運営資金の殆どは寄付に頼っている。そうした中で急速的なアクセス数の増加に、サーバの増強が追いつかずにいる。賛助企業のサーバに間借りさせて貰ってはいるが、それでも追いついていないのが現状である。

また、アクセス数の急増により、コミュニティサイト、質問サイト、宣伝など、Wikipediaを百科事典以外の目的に使用するユーザも増加している。

アクセス急増以前から批判されている点もある。それは内容の正確性についてである。

これまでにJohn Seigenthaler氏の経歴改竄事件^[22]やNatureによるBritannicaとの比較^[23]、アリアドネのアンケート^[24]等で耳目を集めているが、そもそもWikipediaはその誰もが編集できるという性質上、その内容は時と共に変化するものであり、また、アカウントの作成の際に、特に個人情報の入力を求めているため、誰が編集しているのかが分からないもの

である^[25]。従って、その内容に誤りが存在するのは、その特質上やむを得ないことである。そうした点を批判することは誰にでもできることであり、建設的とは言えない。

ではあるものの、財団はそうした批判に答えるべく、今後は量よりも質を重視する声明を発表し^[26]、Mediawikiの改訂による投稿制限やピア・レビューの導入、専門家による諮問委員会の設立などを検討している。

■ 将来について

Wikipediaを含むWikimedia Projectは、これまでともうであったように、今後も発展し続けていくものと思われる。

但し、今後はこれまでとは異なり、規模の拡大よりも、上述したように、社会に好意的に定着することに重点が置かれていくものと思われる。

博士号保持者による査読付きNupediaから出発し、誰もが編集できるWikipediaとなり、そしてまた、多少の編集制限、簡易査読を設けたWikipediaに。

計画というものは予想通りにはいかないものであり、社会に受け入れられるためには多少の妥協も必要であるが、そのWikipediaが持つ自由性に制限がかかりすぎると、人々は離れていってしまうだろう。今後Wikipediaがうまくいくかどうかは、この1、2年にかかっていると筆者は考える。

参考文献

- 「Wikiつまみぐい第7回—ウィキペディア日本語版の世界 前編」(Gleam著、『Software Design』2006年2月号、技術評論社)
- 「Wikiつまみぐい第8回—ウィキペディア日本語版の世界 後編」(Gleam,Suisui著、『Software Design』2006年3月号、技術評論社)
- 「デジタル・レファレンス・ツールとしてのWikipedia」(兼宗進著、『情報の科学と技術』56-3号、2006年、情報科学技術協会)

注

- [1] Wikipedia : <http://www.wikipedia.org/>
- [2] 詳細についてはWikipedia内の「Wikipedia: ガイドブッ

- ク」を参照のこと。
- [3] Wiki クローンについては、本誌5号(2004年)の特集1「Wiki・Weblogと人文学」を参照のこと。
- [4] MediaWiki: <http://www.mediawiki.org/>
- [5] Wikimedia 財団: <http://meta.wikimedia.org/>
- [6] 同財団が提供する Wikipedia 以外のプロジェクトとして、辞典の Wiktionary (<http://en.wiktionary.org/>)、教科書の Wikibooks (<http://en.wikibooks.org/>)、画像・音声等のメディアファイル収蔵庫の Wikimedia Commons (<http://commons.wikimedia.org/>) などがある。
- [7] Nupedia: 執筆者を博士号所持者に限定し、査読制度も設け、項目の質の維持に重点を置いたオンライン百科事典。2000年3月に運営が開始されたが、参加者が少なく、活動的とは言えなかった。2001年1月に Wikipedia が開始されると、参加者がそちらへ移動したため、休眠状態となり、2004年にその活動を終えた。
- [8] コピーレフト: 著作物の利用を促進させるために、著作権者が指定するライセンスに従う事を条件に利用・改変等の制限を緩和する思想。
- [9] 項目: ウィキペディア内では「記事」と呼ばれていることもある。
- [10] メインカルチャーの中では、生物学、数学が比較的充実している。
- [11] スキンによっては上部にない場合もある。
- [12] 履歴ページ: [編集] タブの右隣の [履歴] タブをクリックすると、閲覧することができる。
- [13] GFDL: <http://www.gnu.org/licenses/fdl.html>
- [14] フリーソフトウェア財団: <http://www.fsf.org/>
- [15] 同財団が提唱するその他の有名なライセンスとしては、ソフトウェアの分野で採用されている GPL (GNU General Public License) がある。
- [16] 条件の詳細な内容については、注13のリンク先を参照のこと。
- [17] 項目の編集内容についての討論は、各項目のノートページ ([編集] タブの左隣の [ノート] タブをクリックすると表示される) にて行う。
- [18] Wikipedia では、「方針」は全ユーザが遵守すべきもの、「ガイドライン」(或いは「指針」) は尊重すべきものと解されている。
- [19] その他の方針等については、Wikipedia 内の「Wikipedia: 基本方針とガイドライン」を参照のこと。
- [20] Alexa: <http://www.alexa.com/>
- [21] 因みに、1位は Yahoo! で2位は MSN、16位は Amazon である。
- [22] 「成長の痛みを味わう Wikipedia—2つの「事件」で問われる在り方」(CNET Japan, 2005.12.06): <http://japan.cnet.com/news/media/story/0,2000056023,20092212,00.htm>
- [23] 『『ネイチャー』誌、ウィキペディアの正確さを評価』(Hotwired Japan, 2005.12.15): <http://hotwired.goo.ne.jp/news/technology/story/20051219302.html>
- [24] アリアドネのアンケート: <http://ariadne.jp/enquete200602/cgi-bin/enquete.cgi>
- [25] 誰が編集しているのかが分からないという点については、Wikipedia 以外のサイトについても同じことが言えるのだが。
- [26] 「ウィキペディアのウェールズ氏、ウィキメディア財団のこれからを語る」(CNET Japan, 2006.08.07): <http://japan.cnet.com/news/media/story/0,2000056023,20193547,00.htm>

Wikipedia アンケートのまとめ

師 茂樹

□ アンケートについて

■ 経緯

本アンケートは、オンライン百科事典の Wikipedia (本誌藤原氏のレビュー参照) の内容をどのように評

価すべきか、という一連の議論^[1]と問題意識を共有している。

■ 質問方法

アンケートは、7月18日から9月9日の間、漢字文献情報処理研究会のBBSおよびmixiのコミュニティ「漢字文献情報処理研究会」^[2]で行われ、12人